

エゾシカWGの議論経緯のまとめ（2004―2024）

資料4－2（別紙）

会議名	年度	回	開催日時	議事次第	議事概要	計画等	主なトピック
エゾシカWG	2004年度（H16）	第1回	2004/7/8	(1)環境省東北海道地区自然保護事務所長挨拶 (2)知床世界自然遺産候補地科学委員会エゾシカ・ワーキンググループの設置について (3)知床半島のエゾシカを巡る自然環境の現状 (4)自然保護区におけるシカ管理のあり方 (5)各年度の調査計画及び検討作業の進め方 (6)その他	・世界遺産登録推薦に向け、エゾシカの個体数増加が植生に与える影響が重大な懸念事項となる中、科学的知見に基づく管理体制の構築を目指して設置されたWGの初会合。 ・エゾシカの個体数増加が植生に与える影響や、過去の生態系におけるエゾシカの動態に関する科学的データの不足が共通認識。 ・シカの過密状態が生物多様性を損なう可能性に対する共通認識を持ちつつ、個体数調整の必要性やその実施方法について、様々な選択肢を議論し、今後の調査や管理計画の策定に向けた方向性を模索。		エゾシカWG設置の目的 ・知床半島エゾシカ管理計画に基づく各種対策の実施・評価・見直し ・エゾシカの個体群動態と植生等に関するモニタリング手法の検討、実施、評価 ・関係機関との連絡調整 桐座長を中心に5名のWG委員で構成 エゾシカ保護管理計画の基本的考え方の整理 ・エゾシカの主な増加要因は人為的か ・自然推移に委ねた場合の影響は不可逆的な「悪影響が」生じうるか ・計画の時間的、空間的なスケールは
		第2回	2005/2/15	(1)環境省東北海道地区自然保護事務所長挨拶 (2)知床半島におけるエゾシカ保護管理計画の基本的考え方について (3)調査項目の優先順位の設定と年次計画について (4)来年度の予定について (5)その他	・知床半島におけるエゾシカ保護管理計画の基本的考え方を議論し、特にエゾシカによる植生への影響が不可逆的な「悪影響」なのか、生態系プロセスの一部として「回復」し得るのかという点について深く議論。 ・保護管理計画の目標とする時間スケール（明治以前の植生復元など）や、具体的な管理区域（ゾーニング）の設定、さらには個体数調整の効果測定調査の必要性など、多岐にわたる課題と今後の調査計画について協議。		
	2005年度（H17）	第1回	2005/9/25	(1)環境省東北海道地区自然保護事務所長挨拶 (2)第29回世界遺産委員会の結果報告について (3)昨年度調査結果及び今年度調査計画について (4)エゾシカ保護管理計画骨子案について (5)その他	・遺産登録後初めてのWG。「エゾシカ保護管理計画骨子案」について以下の点について議論。 ・計画の対象地域に隣接地域、特に居住地域を含めるべきか。その範囲と管理手法についての検討。 ・エゾシカの採食圧による植生への影響が「不可逆的で早急な対応が必要」な認識（スタンスI）か、あるいは「生態系プロセスの一部であり、慎重なモニタリングで足りる」認識（スタンスII）かという、二つの異なる見解について議論。花粉分析の結果から、現在の採食圧は非常に強いことが示唆。 ・モニタリング計画を独立した章とすることや、将来のデータに基づいて計画を見直していく順応的な管理の考え方が重要との認識で一致。		エゾシカ保護管理計画の基本的考え方の整理 ・エゾシカの採食圧による植生への影響が「不可逆的で早急な対応が必要」（スタンスI）か、あるいは「生態系プロセスの一部であり、慎重なモニタリングで足りる」認識（スタンスII）か ・花粉分析等の調査実施 ・順応的な管理手法のあり方とモニタリングの手法・計画 植生モニタリングの開始 ・植生の現状把握と個体数調整に対応した植生の状態をモニタリングするための調査を開始。 ・石川教授を中心に、海岸から高山帯まで多様な環境の植生調査と、継続的にモニタリングを進める調査プロットの設定を毎年実施。 エゾシカ保護管理計画の要点を合意 ・計画の目標は、過去のある時点の静的な種構成の回復ではなく、生態的過程により変動する動的な生態系の再生。近代的な開拓が始まる前（明治以前）の生態系をモデルとする ・エゾシカの増加要因が生態的過程か人為的なものを区分することは、現在の知見からは判断できない。長期的に自然に放置した場合に、甚大な生態系への影響が生じている現状を踏まえ予防原則に基づき、早急に個体数調整を含めた保護管理措置を実施。 ・計画対象地を遺産地域A地区・遺産地域B地区・隣接地区に区分し、地区ごとに管理方針を設定。知床岬のように早急に保護管理を実施することが必要な地域（特定管理地区）については、別途管理方針を策定する。 ・保護管理を行いながら、その結果をモニタリング・評価・検証しつつ、管理方針に反映させていく順応的管理手法を採用する。
		第2回	2006/2/5	(1)環境省北海道地方環境事務所釧路自然環境事務所所長挨拶 (2)本日の議事進行について (3)エゾシカ保護管理計画骨子の構成について (4)その他	・知床半島エゾシカ保護管理計画骨子案の要点について合意。 ・エゾシカによる植生への不可逆的な悪影響を軽減するため、人為的管理が必要との認識を再確認。 ・季節移動を考慮し隣接地域を計画対象に含めることを明確化。北海道のエゾシカ保護管理計画との整合性を図ることを確認。 ・基本方針として在来植物の地域絶滅回避を目標に、個体群レベルと群落レベルでの保全対策を講じる。 ・手法として密度操作実験の候補地を4ヶ所に絞り込み、「最も人道的な手法」としての銃捕獲の検討や、防鹿柵設置、越冬環境改変も含まれるとされた。		
	2006年度（H18）	第1回	2006/6/3	(1)環境省釧路自然環境事務所長挨拶 (2)平成18年度調査計画について (3)エゾシカ保護管理計画策定スケジュールについて (4)エゾシカ保護管轄計画案について (5)評価基準の設定について (6)密度操作実験予備調査について (7)その他	・管理計画における「遺産地域A」と「遺産地域B」という新たな区分に基づく管理方針、評価基準、および具体的な管理手法について協議。 ・シカによる採食圧の調査方法や、密度操作実験の実施可能性とそれに伴う課題、地域住民との合意形成の重要性について確認。		
		第2回	2006/9/29	(1)知床半島エゾシカ保護管理計画案(案)について (2)実行計画の策定について (3)今後のスケジュール (4)その他	・地元説明会の結果が報告され、住民からは「早く対策を講じてほしい」という強い要望が共有。 ・計画案は、これまでの「ゾーン」を「地区」に、「評価基準」を「評価項目」に名称変更。柔軟な対応を可能にする「実行計画」の概念を導入。 ・エゾシカ密度操作実験については、知床岬地区とルサ・相泊地区が先行実施の候補地として具体的に検討。「数年間で個体数を半減させる」という目標の実現可能性とモニタリングの重要性を確認。 ・会議後、計画案はパブリックコメントに付し、その後に成案とするスケジュール。	知床半島エゾシカ保護管理計画2006年11月	エゾシカ保護管理計画の策定 ・住民説明会、パブリックコメント等による合意形成
		第3回	2007/2/16	(1)環境省釧路自然環境事務所長挨拶 (2)「知床半島エゾシカ保護管理計画」の策定及びその後の経過報告 (3)今年度調査中間報告 (4)平成19年度実行計画案について (5)その他	・知床半島エゾシカ保護管理計画が確定し、道のエゾシカ計画の地域計画として位置づけられた。 ・2007年度実行計画案を協議。密度操作実験の手法や目標頭数（数年間で個体数を半減）、植生回復（イネ科草本、不食草など）や個体数、土壌浸食に関するモニタリング項目の詳細検討が進んだ。		
	2007年度（H19）	第1回	2007/7/2	(1)環境省釧路自然環境事務所長挨拶 (2)前回WG以降の調査結果等報告 (3)平成19年度知床半島エゾシカ保護管理計画実行計画案について (4)その他	・斜里町からは、ウトロ市街地での捕獲実験や真鯉地区の民間施設による捕獲状況、100平方メートル運動の方針転換手続きも説明された。 ・密度操作実験の先行実施地区は知床岬とされ、銃器使用が最も効率的かつ最善の手法と結論。実行計画案では、知床岬で年間メス150頭の捕獲が目標と明記され、隣接地域での狩猟による密度操作試行も検討されることが示された。	エゾシカ保護管理計画実行計画2007年7月	エゾシカ保護管理実行計画の決定 ・知床岬での密度操作実験の決定 ・メディア、報道機関向けへの説明会の実施 「知床エゾシカファーム」の事業開始 ・捕獲動機の強化と有効活用に道筋 世界遺産地域内での初の密度操作実験と手法の開発（2007） ・2007年12月に知床岬での密度操作実験が開始。高台からの狙撃による捕獲。捕獲成果は2日間で32頭という、事前の目論見からすれば少ない数。 ・2008年1月以降は巻狩中心の手法以降。同シカ年度に10回超の実施で132頭の捕獲。 ・捕獲手法の試行錯誤が継続。 北海道による輪探制狩猟の試行（隣接地域）
		第2回	2008/3/4	(1)環境省釧路自然環境事務所長挨拶 (2)IUCN調査団の調査結果(報告)について (3)平成19年度知床半島エゾシカ保護管理計画実行計画の実施状況について (4)平成20年度知床半島エゾシカ保護管理計画実行計画(案)について (5)エゾシカ・ワーキンググループの設置目的の改正について (6)その他	・IUCN調査団が知床岬での人為的捕獲を支持。 ・北海道の輪探制システムが知床隣接地区で試験導入され、捕獲効率向上を目指す。 ・道路法面の緑化におけるシカへの影響が再議論され、在来種使用や不必要な牧草植え付け抑制を強調。 ・平成20年度実行計画案では知床岬での密度操作継続等が示された。捕獲個体からのデータ収集の重要性や、モニタリング指標の具体化、費用対効果の検証課題として挙げられた。		

会議名	年度	回	開催日時	議事次第	議事概要	計画等	主なトピック
	2008年度 (H20)	第1回	2008/6/25	(1)環境省釧路自然環境事務所長挨拶 (2)ユネスコ世界遺産センターによる保全状況調査報告書について (3)平成19年度・H20シカ年度(4～5月) 知床半島エゾシカ保護管理計画実行計画の実施結果について (4)H20シカ年度知床半島エゾシカ保護管理計画実行計画(改訂案)について (5)その他	・IUCN勧告の明確な指標設定の必要性が指摘され、シカの生息数目標ではなく望ましい生態系状況を想定することの重要性を確認。 ・H19シカ年度の実施結果が報告され、狩猟の輪採制導入や狩猟以外の捕獲(囲い罠、箱罠、吹き矢)の成果と課題が示された。 ・真鯉地区での囲い罠による捕獲数減少が報告され、手法見直しの必要性が示唆された。 ・ルサ・相泊地区の季節移動調査計画やエゾシカの遺伝学的解析の提案があった。	第1期計画	知床岬密度操作実験の本格展開(2008) ・知床岬での捕獲を本格展開。 ・11～12月と流水期明けの4～5月(2009年)に計9回、船を使って日帰りで行く捕獲を実施。捕獲数は122頭。 ・流水期のアクセスに課題。 ルサ相泊地区での季節移動調査(～2010年度) 鳥獣被害防止特措法に基づく捕獲の実施(羅臼町)
		第2回	2009/1/13	(1)環境省釧路自然環境事務所長挨拶 (2)知床世界自然遺産地域管理計画について(報告) (3)H20シカ年度知床半島エゾシカ保護管理計画実行計画の実施状況について (4)次期シカ年度事業について (5)知床におけるエゾシカに関する指標開発について (6)その他	・H20シカ年度の実行計画実施状況では、知床岬での密度操作実験(メス成獣120頭以上捕獲目標)が報告されたが、積雪不足やシカの警戒心により捕獲数は伸び悩んだ。 ・死体回収はヒグマ等の捕食による影響が示唆された。輪採制の課題も再確認された。 ・次期シカ年度事業では、知床岬での密度操作実験の継続性やルサ・相泊、岩尾別地区が候補地として議論された。 ・植生回復の指標開発も重要課題とされた。		
	2009年度 (H21)	第1回	2009/6/25	(1)環境省釧路自然環境事務所長挨拶 (2)H20シカ年度エゾシカ保護管理計画実行計画実施結果報告 (3)エゾシカ密度操作実験中間評価と今後の進め方 (4)H21シカ年度知床半島エゾシカ保護管理計画実行計画 (5)エゾシカ関連中長期モニタリング項目と評価指標 (6)その他	・H20シカ年度の知床岬での密度操作実験結果が報告。メス成獣の捕獲目標120頭には未達だが、全体で254頭を捕獲し、シカの警戒心増大が課題とされた。また、若齢個体の少なさやヒグマ捕食の影響も議論された。 ・植生回復の兆しが報告され、シカ捕獲と植生変化の評価継続が確認された。岬での捕獲手法の見直しが提起され、新たな手法として少人数での餌付け狙撃や柵設置が検討された。 ・次期候補地として岩尾別地区とルサ・相泊地区が挙げられ、それぞれの課題が共有された。		希少猛禽類保護との両立の課題への対処 ・オジロワシに対する捕獲作業の影響への懸念が表出。 ・「希少猛禽類影響等調査事業」を2009～2010年に実施し、オジロワシ研究者からのヒアリングや、意見交換会議を実施。 ・捕獲作業時のガイドラインを合意。 ルサ・相泊地区におけるSSの検討・試行 ・岐阜大鈴木教授の提案による海外事例を参考にシャープシューティングの手法を検討 植生モニタリングに係る調査プロット(92ヶ所)の設定完了 知床岬密度操作実験の3年目(2009) ・船舶によるアクセスに課題。実施時期の制約もありヘリコプターによるアクセスを実施。 ・2月21日から25日までの間3日間の捕獲で1日平均28頭を捕獲し、最多の日は38頭捕獲。 ・ヘリコプターの有用性を実証。以降、船舶と並行して活用が進む。 捕獲効率維持と猛禽類保護のための仕切り柵設置へ ・営巣木への接近防止と巻狩りの追い込みのための仕切り柵を知床岬に設置する案を検討。 ・2010年に設計、2011年に施工し、11月に完成。
		第2回	2009/10/30	(1)H21シカ年度エゾシカ保護管理計画実行計画の実施状況 (2)エゾシカ密度操作実験中間評価と今後の進め方 (3)エゾシカ関連中長期モニタリング項目と評価指標 (4)その他	・世界遺産委員会からの勧告を踏まえ、植生指標開発とモニタリング体制が議論された。知床岬の草原植生では、最終目標である希少植物・高茎草本の回復に向け、イネ科草本やハンゴンソウ群落の量的・組成変化を指標とすることが提案された。 ・森林植生については林床植生データが限定的であり、組成変化を把握するため5m×5mでの調査が提言され、シカ密度低減時の植生回復過程の不明確さが課題とされた。 ・知床岬での密度操作実験の評価として、植生回復の兆しが見られ、実験継続が妥当と結論。新たな捕獲手法として仕切り柵の設置案が検討され、捕獲効率向上と低密度維持のための長期的な手段として前向きに評価。		
	2010年度 (H22)	第1回	2010/5/29	(1)H21シカ年度エゾシカ保護管理計画実行計画実施結果報告 (2)知床岬におけるエゾシカ密度操作実験の評価と今後の進め方 (3)ルサ相泊地区における新たな捕獲手法の試行状況と今後の進め方 (4)H22シカ年度エゾシカ保護管理計画実行計画案 (5)世界遺産委員会等からの勧告への対応について (6)その他	・H21シカ年度実行計画の実施結果が報告。輪採制は明確な効果がなく、事務量負担も大きいため休止が検討。 ・知床岬のシカ個体群シミュレーションでは、ヘリカウントでの大幅な減少と攪乱効果が指摘されたが、ヒグマ捕食や越冬失敗など複合的要因が示唆された。 ・H22シカ年度計画では、捕獲手法として防御的手法や越冬環境改変を組み合わせる方針が示された。 ・広域植生調査はプロットを再配置し、昆虫や鳥類のインベントリ調査も計画された。植生指標については、シカ選好種を含む群落の調査が提案された。 ・ルサ・相泊地区でのシャープシューティング(SS)試行では、実効性検証が課題と指摘。	第1期計画	密度操作実験評価のための知床岬におけるエゾシカ越冬群の航空カウント調査 ・2009年から2012年まで継続実施 「エゾシカ・陸上生態系ワーキンググループ会議」に再編 ・エゾシカへの人為的介入に際しては生態系への影響を慎重に見極めながら進めることというユネスコ/IUCNの要請に対応して、エゾシカばかりでなく、陸上生態系全体も視野に入れてモニタリングしながら進めるワーキングという位置付けを受け、委員の数や専門分野も増やして再編。 公園計画の変更による知床生態系維持回復事業の決定 海外専門家を招聘したSSの検討 ・NPO団体「ホワイトバッファロー」代表のデニコラ博士、ドイツの偶蹄類管理の専門家シャラー氏を招聘 ・流し猟式SS、ハイシートを持ちた狙撃等の手法に知見を踏まえた準備作業も実施。 公道の通行止めによるSSの検討 ・ルサ相泊地区、ホロベツ岩尾別の公道を通行止め、除雪の上での流し猟式SSの試行 ・公道上の車上から狙撃する手法は全国初の事例。
		第2回	2010/10/21	(1)知床岬における今後の捕獲の進め方 (2)ルサ相泊地区における今後の捕獲の進め方 (3)知床半島エゾシカ保護管理計画の見直しについて (4)その他	・知床岬での冬季捕獲は、越冬密度を暫定目標の5頭/km ² とすることを目指し、従来の巻き狩りを主体に実施。この取り組みは、これまでの「実験」から本格的な「事業」へと位置づけられることを確認。 ・ルサ・相泊地区での今後の捕獲は海外専門家の助言に基づき改良したシャープシューティングや、囲いワナなど3つの新たな捕獲方法を試行することを提案。この地区での取り組みは、手法開発段階であり、検討が必要との結論。 ・現行のエゾシカ保護管理計画は2012年3月に計画期間が満了するため、次期計画の見直しに着手。エゾシカの個体数動向や、植生モニタリングのあり方、関係機関との連携などが今後の課題として議論。		
		第3回	2011/3/15	(1)知床半島エゾシカ保護管理計画の見直しについて (2)ルサー相泊地区における捕獲結果の評価 (3)H22シカ年度エゾシカ保護管理計画実行計画の実施状況(速報) (4)世界遺産委員会等からの勧告への対応について (5)その他	・第2期知床半島エゾシカ管理計画の素案を議論。管理計画の構成や表現について改善が求められた。 ・A地区(知床沼、羅臼湖、海岸植生など)への人為的介入を避ける原則の見直し、隣接地域での持続可能な管理体制の構築や地域還元、コミュニティベースの管理を促す目標の明確化などについて指摘。 ・ルサ・相泊地区の捕獲結果が報告され、SSと囲い罠により計125頭を捕獲の実績。今後、年間150～230頭のメス成獣捕獲が必要と試算された。 ・植生指標開発の進め方や長期モニタリング計画の評価基準についても議論。		
	2011年度 (H23)	第1回	2011/6/12	(1)H22シカ年度エゾシカ保護管理計画実行計画実施結果 (2)H23シカ年度エゾシカ保護管理計画実行計画案について (3)第2期エゾシカ保護管理計画(素案)について (4)植生指標開発の進め方と検討の枠組みについて (5)エゾシカ保護管理計画モニタリング項目と長期モニタリング計画について (6)その他	・H22シカ年度実行計画の実施結果が報告。ヘリコプターセンサスでは知床岬のシカ減少、幌別・岩尾別地区の増加傾向が示された。 ・知床岬地区での捕獲支援用仕切柵の設置工事開始が報告。H23シカ年度実行計画案では、ルサ・相泊地区と幌別・岩尾別地区で密度操作実験の開始が提案されたが、希少猛禽類への配慮から巻狩り適期が制約される課題が浮上した。 ・短期間での大幅な個体数削減の必要性が強調され、それが困難な場合は特措法で対応することも示唆された。 ・植生指標開発の作業部会設立が合意された。		ホロベツ・岩尾別地区での密度操作実験の試行開始 ・冬期閉鎖中の道道知床公園線の流し猟式SS、幌別地区のくくりワナと小型囲いワナが試行。 ・自動開閉ゲートによる囲い罠の運用試行。 ・2011シーズンに3つの捕獲方法で、合計452頭を捕獲。岩尾別のSSに突出した成果。 林野庁によるエゾシカ捕獲事業の開始 ・羅臼町の春苧古丹川流域で囲いワナによるエゾシカの捕獲を実施 ルサ・相泊地区の密度操作実験の本格化 ・公園羅臼線を一時通行止めにして行う流し猟式SS、ルサ川左岸の大型囲いワナ、昆布浜での小型囲いワナと、高標高域から降りてこない群を対象とした巻き狩り捕獲など複数手法を組み合わせた捕獲が本格化。 ・2011シーズンに4つの手法で188頭の捕獲。
		第2回	2011/10/29	(1)第2期 知床半島エゾシカ保護管理計画(素案)の修正について(報告) (2)第1回 植生指標検討部会会議について(報告) (3)H23シカ年度エゾシカ個体数調整等事業計画案の見直しについて(報告) (4)中長期目標の位置づけについて (5)その他	・第2期知床半島エゾシカ保護管理計画の素案が修正・確定された。主な修正点は、担い手の表現を「ハンター」から「捕獲技術者」とし、植生回復で用いる植物を「不食植物」から「嗜好性の低い在来植物」とすることである。 ・当該年度の個体数調整計画について、知床岬地区では新設の仕切り柵を用い、密度5頭/km ² を目標とする捕獲試験を行うことを確認した。幌別・岩尾別地区やルサー相泊地区では、路上からのシャープシューティング等の新たな捕獲手法の検討を進める。 ・中長期目標の議論では、各地区で目標とすべき植生の状態を明確にし、その達成に向けた捕獲目標などを定める方針が示された。この目標は、単年度ではなく複数年度にまたがる実行計画として補足的に扱われる。		ヘリコプター、仕切り柵により過去最高の捕獲実績 ・ヘリコプターアクセスによる捕獲を含む3回の捕獲作業で計262頭の捕獲。 ・過去最高の捕獲実績を高効率で達成。仕切り柵の有効性を実証。 知床半島全体のエゾシカ越冬群の把握を目的とした航空官と調査(2月) 斜里・羅臼・標津の一般地域における狩猟による捕獲の頭数制限の撤廃(隣接地域)

会議名	年度	回	開催日時	議事次第	議事概要	計画等	主なトピック
エゾシカ・陸上生態系WG	2012年度（H24）	第1回	2012/6/23	(1) H23シカ年度エゾシカ保護管理計画実行計画実施結果 (2) H24シカ年度エゾシカ保護管理計画実行計画案について (3) 植生指標開発について (4) エゾシカA地区ルシヤおよび隣接地区の管理方針再検討について (5) エゾシカ保護管理計画モニタリング項目と長期モニタリング計画について (6) その他	・H23シカ年度実行計画実施結果が報告。知床岬地区では、新設された仕切り柵の効果もあり、計216頭を捕獲した。ルサ・相泊地区では、道路を閉鎖しての路上からのシャープシューティング(SS)を実施し、188頭を捕獲した。幌別・岩尾別地区では、452頭を捕獲した。 ・H24シカ年度計画案では、知床岬地区では、前年度と同数の216頭の捕獲を目標とする。ルサ・相泊地区では、3年間で個体数を半減させる目標の2年目として、SSを継続する。最大の越冬地である幌別・岩尾別地区では、推定個体数約5,000頭を8年で半減させるには年間1,000頭の捕獲が必要とのシミュレーション結果が示され、その実現可能性や手法について議論が行われた。 ・ルサ・相泊地区では道路工事や希少猛禽類との調整、幌別・岩尾別地区では観光利用と希少猛禽類生息域の問題が課題として挙げられた。	第1期計画	エゾシカ保護管理計画の改定 ・2007年からはじまった知床半島エゾシカ保護管理計画（第1期）が改定され、第2期計画へ ・知床岬地区は、の半減は可能との評価の下、最終目標である5頭/km ² 以下という生息密度の達成に向けた継続事業とし実施。 ・ルサー相泊地区、幌別ー岩尾別地区の2地区については、個体数調整の実験の実施と植生回復の検証を行い「密度操作実験」を本格的に開始することになった。 知床岬での冬期捕獲の定常化 ・流水が開けの4月に船で乗り込んで仕切り柵を使った巻き狩りを行い、翌年の3月前後にヘリコプターで行って仕切り柵を使った巻き狩りを行うスタイルを基本として捕獲事業が継続。 ・捕獲により密度は低減したが、5頭/km ² をめざして設定された捕獲目標には毎年達せず。密度の低下、警戒心の向上により捕獲効率が徐々に低下。
		第2回	2012/10/25	(1) H24シカ年度エゾシカ個体数調整実施計画について（報告） (2) H24シカ年度モニタリング事業結果（速報値） (3) 個体数調整事業の評価方法について (4) その他	・知床岬地区で仕切り柵を用いた効率的な捕獲を継続し、ヘリと船舶による捕獲も実施する計画を報告。 ・ルサ・相泊地区と幌別・岩尾別地区では3カ年計画で密度操作実験を開始し、幌別・岩尾別地区では大型仕切り柵導入が計画。ルサ・相泊地区の捕獲目標は300頭、3カ年で5頭/km ² の実現を目指す。 ・植生モニタリング結果速報では、昆虫調査の年変動の大きさや、シカ影響がない場所での相対値比較の重要性が指摘された。長期モニタリング評価では、知床岬での捕獲開始後の植生回復が確認され、回復が顕著な植物種（クサフジ、ヒロハクサフジ、ササなど）が報告された。	第2期 知床半島 エゾシカ 保護管理計画 2012年3月	航空カウント調査の定常化と広域化 隣接地域での捕獲事業の本格化 ・羅臼側（春刃古丹川流域）と斜里側（国指定鳥獣保護区とその周辺）で継続的に実施。（林野庁事業） ・猟友会と連携したコミュニティベースの捕獲事業も実施。
	2013年度（H25）	第1回	2013/6/24	(1) H24 シカ年度エゾシカ保護管理計画実行計画実施結果 (2) H25 シカ年度エゾシカ保護管理計画実行計画案について (3) 植生指標開発の進捗状況について (4) 第3 期に向けた隣接地区・エゾシカA地区の管理方針の検討について (5) その他	・知床岬地区のシカは当面目標の5頭/km ² 以下を達成、ルサ・相泊地区も目標に近づき、幌別・岩尾別地区も達成可能性が示された。 ・知床岬での低密度維持手法の検討が開始され、ルサ・相泊地区では北側の密度高い区域、幌別・岩尾別地区では未着手の幌別側への対応が課題とされた。 ・H25シカ年度計画案では、幌別・岩尾別地区の大型仕切り柵設置を検討。ルシヤ地区は、ヒグマへの影響を考慮しつつ季節移動調査や捕獲手法検討を進める方向性が示された。 ・植生モニタリング速報では、知床岬の回復傾向が報告され、国後島調査ではシカ不在の植生が参考とされた。		ホロボツ・岩尾別地区での密度操作実験の展開と手法の洗練（2012～2014） ・2012年から2014年（シカ年度）は密度操作実験の期間と位置づけて、さらなる検討を進めた。 ・新手法としては、春と秋の無雪期におけるしれとこ100平方メートル運動地内の作業道を使った流し猟式SS、自動捕獲装置（AI ゲートかぞえもん）を活用した囲いワナを試行した。さらに、 ・2012年には環境省事業で、岩尾別にシカの捕獲のための大型囲い柵を設置。広範囲に自然草原を囲い、草原の草本や給餌した餌を利用してシカを誘引して捕獲するもの。
		第2回	2013/9/29	(1) H25 シカ年度エゾシカ保護管理計画実行計画について (2) 個体数調整の中長期目標について (3) 長期モニタリング計画に基づくモニタリング項目の評価について (4) ルシヤ地区における事業計画について (5) H25年度モニタリング事業結果（植生・速報値） (6) 国後島植生調査報告 (7) その他	・H25シカ年度冬期事業実行案を議論。知床岬では低密度維持のため、低コストで少人数による捕獲手法が検討。幌別・岩尾別地区の捕獲目標400頭に対し、正確な生息数把握が課題とされ、巻き狩りの実施判断も慎重に行う方針。 ・長期モニタリング計画の評価では、知床岬のシカ密度低減に伴う植生回復（アメリカオニアザミの減少、嗜好性植物の回復）が報告された。しかし、各モニタリング項目間の評価基準の整理不足が指摘され、より具体的な指標設定が求められた。 ・ルシヤ地区は、シカの集中度が高いが、季節移動調査を含む現状把握に重点を置くことで合意。 ・生態系維持回復事業計画の改定については、知床半島エゾシカ保護管理計画に具体的な内容を集約する方針を確認。		
	2014年度（H26）	第1回	2014/7/12	(1) H25シカ年度エゾシカ保護管理計画実行計画実施結果について (2) H26シカ年度エゾシカ保護管理計画実行計画案について (3) 植生指標について（報告） (4) 隣接地区の捕獲事業について (5) エゾシカA地区（ルシヤ地区）の季節移動調査等について (6) 知床国立公園知床生態系維持回復事業計画の改定について (7) その他	・H25シカ年度実行計画の結果を報告。知床岬では当初目標の5頭/km ² 達成後もオス流入と捕獲減で増加傾向にあり、継続的な低密度維持手法検討が課題。 ・ルサ・相泊地区は目標に近づく一方、幌別・岩尾別地区も達成可能性が示唆された。 ・植生指標は、草原現存量の増加、嗜好性植物の回復、希少種の回復の4段階評価が完成し、アメリカオニアザミの減少が成果として報告。 ・隣接地域（ウトロ、遠音別、真鯉）での囲い農増設と銃捕獲の強化が計画された。 ・ルシヤ地区ではGPS首輪による季節移動調査が開始。		捕獲成果の見える化と事業化（ルサ・相泊地区） ・密度操作実験最終年の2014年には、既に目標の平方キロあたり5頭を下回る3.4頭/km ² の生息密度まで低下。 ・WGにおける評価の結果、当地区の捕獲事業は、2015年以降は継続的な密度調整事業へ移行。 ・今後の事業展開に当たっては低密度下を達成した後、より低コストで効率的な手法で捕獲圧をかけ続けるための新たな手法の検討が課題に。 観光と捕獲事業との両立問題 ・五湖の冬期ツアーへの配慮から2014年以降道々知床公園線沿いの流し猟式SSIは中止。その後は、岩尾別川河口付近の短い区間における流し猟式SSIに移行。 ルシヤ地区における調査の開始 ・GPS標識による季節移動、分散調査
		第2回	2014/10/1	(1) H26シカ年度エゾシカ個体数調整事業計画（案）について (2) 遺産地域内におけるエゾシカ個体数調整に係る中長期的な考え方について (3) 長期モニタリング計画に基づくモニタリング項目の評価について (4) H26シカ年度モニタリング事業結果速報 (5) その他	・H26シカ年度実行計画の進捗状況が報告された。知床岬の捕獲はメス成獣の多くが午後に柵内に入ることが判明し、捕獲スケジュールの見直しが提案。 ・幌別・岩尾別地区の仕切り柵での捕獲数は想定を下回った。シカ数の減少が原因と推測。仕切り柵の維持補修費が高額であることが課題。 ・遺産地域内個体数調整の中長期方針では、知床岬での捕獲コスト抑制と低密度維持の両立が重要課題とされた。 ・植生モニタリング速報では、シカ選好性が高くない植物（ササ、イラクサ、オオヨモギ、マイヅルソウなど）がシカ密度低下に敏感に反応することが報告。 ・ルシヤ地区の季節移動調査では、シカが夏期には高標高域に移動する傾向が示された。		
	2015年度（H27）	第1回	2015/8/27	(1) H26シカ年度エゾシカ保護管理計画実行計画実施結果について (2) H27シカ年度エゾシカ保護管理計画実行計画案について (3) 低密度維持のための管理と指標について (4) 第3期管理計画策定スケジュールについて (5) その他	・第2期知床半島エゾシカ保護管理計画の期間終了が平成28年度末に迫っており、第3期に向けた点検が開始。 ・ルサ囲いわな周辺で大雪によりシカが海岸線に滞留する期間が長くなった可能性が指摘され、継続的な罠の有効活用が示唆された。 ・知床岬地区での推定生息密度やヘリコプターカウント調査の結果が確認された。 ・植生指標については短期と中長期を組み合わせた評価の必要性が提言され、仕切り柵の維持コストと捕獲効果の比較検討、将来的な撤去の可能性も議題に上がった		幌別・岩尾別地区の密度操作実験は事業化へ 隣接地域での捕獲事業の展開 ・囲い罠：ウトロ東、ウトロ国設知床野営場、フンベ川左岸、弁財崎、オシンコシン崎に2基、真鯉沢の8基が展開され、一定数のシカが入った時点で自動的に扉を落とす捕獲装置（AI ゲートかぞえもん）も活用して捕獲を実施。 ・オベケブ林道を除雪して林道沿いに餌づけを行い、車内からの狙撃を行うモバイルカリングによる捕獲、餌づけした箇所に出現するシカを遠距離から狙撃する捕獲、まき狩りによる捕獲を試行。
		第2回	2015/11/12	(1) H27 シカ年度冬期事業実行案について (2) H27 シカ年度植生モニタリング事業結果速報 (3) 平成26年度長期モニタリング事業評価 (4) 知床半島エゾシカ保護管理計画の見直しについて (5) その他	・ルシヤ地区で新たにシカ4頭にGPS首輪を装着し、季節移動の調査を行う計画が報告された。 ・第3期管理計画（平成29年度～）の策定に向け、基本的な方針を議論。大きな論点として、ルシヤ地区を非介入の「対照区」として維持するべきか、あるいは植生やヒグマへの影響を考慮して人為的な管理を行うべきかについて協議。 ・将来的に、高コストな国の事業から、地域が主体となった持続可能な管理体制へ移行する必要性が提起。知床の取り組みを全国の国立公園におけるシカ管理のモデルとして位置づけてはどうかとの意見もあり。		

会議名	年度	回	開催日時	議事次第	議事概要	計画等	主なトピック
エゾシカ・ヒグマWG	2016年度 (H28)	第1回	2016/6/28	(1) H27 シカ年度エゾシカ保護管理計画実行計画実施結果について (2) H28 シカ年度エゾシカ保護管理計画実行計画案について (3) 第3期管理計画案案について (4) その他	・前年度事業結果について、各地区での捕獲結果が報告されたが、多くの地区で捕獲数が目標に達しなかった。原因として、捕獲圧によるシカの警戒心向上やアクセスの困難さといった物理的・社会的な制約、また希望的観測に基づいた高い目標設定などが挙げられた。 ・A地区(ルシヤ地区)のGPS調査では、対象個体は地区外へ季節移動しないことが改めて確認された。 ・過去10年間に蓄積された膨大な植生モニタリングデータが報告書レベルでしか存在せず、横断的な分析が困難であることが問題視された。今後の計画策定と評価のため、デジタルデータベースを構築することが急務であると確認された。 ・改正鳥獣保護管理法に基づく「指定管理鳥獣捕獲等事業」の導入など、新たな管理手法や体制を第3期計画で検討していく必要性が指摘された。また、北海道の計画との整合性を図るため、計画名称を「保護管理計画」から「管理計画」へ変更することが提案された。	第2き計画	捕獲成果の見える化 ・航空カウント調査の結果から、知床半島全域で目標の5頭/k㎡を下回る密度が達成。特に、斜里側の密度低下が顕著。 ・幌別・岩尾別地区では2011年に地区全体で1200頭あまりが確認されたエゾシカが、次に広域航空センサスが行われた2016年では20%以下にまで減少。 ・これらの成果を受けて、当地区の密度操作実験は、2015年以降は継続的な密度調整事業へ移行。 ・第2期計画最終年の2016年にはついに目標の平方キロあたり5頭を下回る4.6頭/k㎡の密度まで低下。 捕獲効率低下の課題(ホロベツ・岩尾別地区) ・密度低下や警戒心の高まりから捕獲効率が低下。知床公園線沿いの流し猟式SSは、道路沿いで発見できる頭数が減るとともに、残存した群は警戒心が強く、3頭以下の群に分割することが困難に。 ・固定式の大型の囲いワナは、繰り返し捕獲を行っているうちにシカに警戒されるようになって、中に入らなくなる傾向が強くなり、効率が低下。幌別川河口と岩尾別川河口に設置した大型囲いワナは2017年に使用を終了。 第3期計画に向けたモニタリング調査、検討の進行 ・3回目の知床半島全域の航空カウント調査、見落とし率の推定調査。 ・ルシヤ地区の取り扱い、低密度状態における低コストでの捕獲手法が課題に。
		第2回	2016/10/7	(1) 第3期知床半島エゾシカ管理計画(素案)について (2) H28シカ年度植生モニタリング事業結果速報 (3) H28シカ年度冬期事業実行案について (4) 平成27年度長期モニタリング事業評価 (5) その他	・第3期計画の目標値について、個体数の増減傾向を示す「指数」ではなく、具体的な「密度」(例5頭/k㎡)を主たる目標とすることで合意。また、管理ユニットとモニタリングユニットの区画を一致させる調整が行われ、捕獲効果の評価精度向上が図られた。 ・人為的介入をしないA地区(ルシヤ地区)の管理方針が論点。議論の結果、当面は現行案の表現を維持しつつ、状況に応じた対応の選択肢を残すことで合意。 ・今年度冬季の捕獲計画が示され、シャープシューティング(SS)では可能な限りメス成獣を選択的に捕獲する方針が確認された。捕獲手法の効率性や持続性について議論があり、非効率な手法の見直しや、より持続可能な体制への移行が課題。 ・ヘリコプターセンサスの見落とし率について、より精度の高い数値を把握するための検証調査を行う計画が報告。 ・前回会議に続き、過去の膨大な植生モニタリングデータを整理・活用するためのデータベース化を進めることが確認。		
		第3回	2017/1/12	(1) 第3期知床半島エゾシカ管理計画(案)について (2) 平成27年度長期モニタリング事業評価について (3) その他	・第3期管理計画(案)の確定: 計画案の文言や用語の最終調整が行われた。 ・モニタリング評価とデータの問題: 平成27年度の長期モニタリング評価が確定された。 ・ワーキンググループの再編: 次期より、本ワーキンググループをヒグマWGと統合し、「エゾシカ・ヒグマワーキンググループ(仮称)」として再編する案が示された。委員からは、議論の時間を確保するため、現地視察を交えた会議開催などの工夫を求める意見が出された。	第3期 知床半島 エゾシカ 管理計画 2017年4月	
	2017年度 (H29)	第1回	2017/6/20	(1)H28 シカ年度実行計画実施結果について 1)エゾシカ個体数調整実施結果 2)個体数モニタリング事業結果(航空カウント等) 3)植生モニタリング事業結果 (2)H29 シカ年度実行計画案について 1)実行計画案 2)エゾシカ捕獲事業案 3)植生モニタリング事業案 (3)植生モニタリングのデータベース化について	・知床岬では、メス成獣の捕獲優先により子ジカも減少したが、周辺の高密度地域からの流入が依然として継続。 ・航空カウント調査は、特に針葉樹林帯で見落とし率が高く、絶対数ではなく増減を把握するための密度指標として捉える必要がある。 ・今後の捕獲は、低コストで持続可能な手法を試行し、低密度維持と生態系回復を目指す方針であることを確認。 ・植生は、シカの採食圧低下に加え、植生間の相互作用も考慮した評価が重要であると指摘された。 ・隣接地域におけるコミュニティベースでの管理体制は、シカの減少により困難になりつつあり、今後の管理方針の議論が課題である。		「知床半島エゾシカ管理計画(第3期)の策定・開始 ・知床岬地区、ルサー相泊地区、幌別・岩尾別地区は個体数調整事業を継続的に行う地域として位置づけ。 ・ルシヤ地区はひきつづき対照区として人為的介入をぐわえない。 ・知床岬地区は達成されていない密度管理目標をめざした新たな管理手法の検討を、低密度化に成功したルサー相泊地区、幌別・岩尾別地区では低密度維持のための低コストかつ効率的な手法開発を進める。 エゾシカ・ヒグマWGに改組 ・座長が宇野研究主幹に交代。WG委員も増加し、12名で構成(特別委員を含む) ・ヒグマの保護管理に関する事項もWGの正式な検討項目に加えられた。いずれも多くの課題を抱えた2つのテーマを議論するため、会議は基本的に2日間にわたって行われるのが常となった。 知床岬の捕獲事業10年目 ・捕獲事業開始前より越冬個体数を20%以下にまで減少させた。 ・一方で、エゾシカの個体数の減少や捕獲を避けての分布の変化、警戒心の高まりなど複合的な要因で、第2期計画の2012年以降は捕獲効率が大きく低下。
		第2回	2017/11/27	(1) H29シカ年度冬期事業案について (2) H29シカ年度植生モニタリング事業結果について(速報) (3) 植生指標について (4) 長期モニタリング計画の見直しについて(エゾシカ関係) (5) その他	・2017年度冬期の事業として、世界遺産地域内での囲いワナによる捕獲や、隣接地域での猟友会による捕獲、および航空カウント調査の実施が計画。 ・植生モニタリング結果: 密度操作を行っている知床岬地区では植生の回復傾向が見られるが、幌別・岩尾別地区では十分な回復が見られず、対策がされていないルシヤ地区ではシカの影響が顕著であると報告された。 ・植生指標: 植生の回復度を評価するため、嗜好性の高い植物や希少種の回復を段階的に評価する指標を検討していく方針を確認。 ・長期モニタリング計画: 長期モニタリング計画の見直しが行われ、森林、海岸、高山帯の植生調査について、特に海岸植生の評価を独立させるべきとの意見が出された。		
	2018年度 (H30)	第1回	2018/5/24	(1) 2017(H29)シカ年度実行計画実施結果について (2) 2018(H30)シカ年度実行計画案について (3) 植生モニタリング及び植生指標について (4) 長期モニタリング計画の見直しについて(エゾシカ関係) (5) その他	・2017年度の航空カウント調査では、ルシヤ・相泊および幌別・岩尾別地区で発見密度が目標値を下回ったが、実際の生息密度が目標値を下回っているかは不明。 ・2018年度の実行計画案: 知床岬では、大型仕切り柵の一部を囲いわなとして活用し、遠隔操作での捕獲を試みる計画。隣接地域では、囲いわな、箱わな、銃による捕獲を継続する予定である。 ・隣接地域の管理方針: 現在の低密度な状態は、農林業被害の抑制には成功しているが、狩猟資源や利活用の観点からはシカが少なすぎるのが課題。今後は、コミュニティベースで持続可能な管理目標を検討する必要がある。 ・植生モニタリング: 知床岬の海岸草原では柵外でも植生の回復が見られる一方、森林部では稚樹の更新が確認されず、回復には時間がかかるとの見通し。エンレイソウなど重要な指標種については、調査時期を工夫してモニタリングを継続する必要がある。		低コスト・低密度維持を目的とした幌別・岩尾別地区での捕獲実施 ・低コストで持続的に低密度状態を維持するための捕獲手法について、さまざまな試行を実施。 ・移動式の箱罠の運用 ・100平方メートル運動地内の作業道を使った無雪期の流し猟式SSの実施 ・海岸段丘上の自然草原を広く囲った大型仕切り柵を囲いワナとして使った捕獲
		第2回	2018/11/19	(1) 2018(H30)シカ年度冬期事業案について (2) 植生モニタリング及び植生指標について (3) 長期モニタリング計画の見直しについて(エゾシカ関係) (4) その他	・2018年度冬期の捕獲事業として、ルサ・相泊地区で流し猟式シャープシューティングを再開することを計画。隣接地域では、くくりわなの導入が検討されている。 ・植生指標部会の検討結果としてチンミアザミやミソガワソウの減少傾向が指摘された。 ・これまでの長期モニタリング項目の見直し・整理。鳥類や昆虫、中小大型哺乳類に関する項目は、生態系を広域で見えていくために引き続きこのワーキンググループで受け持つ。 ・2016年に知床岬でアライグマが確認されて以降、追加の目撃情報はない。しかし、半島基部では散発的に確認されており、遺産地域への侵入が懸念。 ・エゾシカの低密度化が実現しつつある中、今後の捕獲の戦術と戦略が課題。専門家を招聘し、低密度下での管理について議論する必要性が提案された。		オベケブ川で餌づけしたシカの群れを遠方から狙撃する捕獲(隣接地域)
	2019年度 (R1)	第1回	2019/6/26	(1) 2018(H30)シカ年度実行計画実施結果について (2) 2019(R1)シカ年度実行計画案について (3) 植生等のモニタリングについて (4)長期モニタリング計画の評価項目の評価について(ヒグマ・エゾシカ関係) (5)その他	・2018年度の実施結果:航空カウント調査では、知床岬の発見頭数は22.91頭/k㎡であった。捕獲については、経年変化がわかりやすいよう、捕獲頭数の推移を示す資料の改善が必要。 2019年度の実行計画案として遺産地域内では、知床岬でくくりわなや囲いわな、銃による捕獲が計画されている。えさには、外来種の持ち込みリスクを考慮しつつ、デントコーンサイレージやヘイキューブが検討されている。 ・隣接地域では、引き続き捕獲が計画されている。また、シカの低密度化により、利活用施設でシカが不足するという新たな課題が生まれており、低密度化後の管理目標をどう定めるかが今後の課題。 ・植生モニタリング: 幌別・岩尾別地区などでは下枝被度やササの回復が見られるものの、稚樹の回復は確認されていない。		道々知床公園羅臼線を通行止めにして行う流し猟式SSの再開(2020年まで) オベケブ、遠音別、金山で巻き狩りや遠距離狙撃による捕獲(隣接地域)
		第2回	2019/12/23	(1) 2019(R1)シカ年度冬期事業計画(報告) (2) 2019(R1)シカ年度植生、鳥類、昆虫類モニタリング結果(速報) (3) 世界遺産地域の隣接地域における今後の管理方針 (4) 日没時銃猟と捕獲個体の残置 (5) 長期モニタリング計画の評価方法(ヒグマ・エゾシカ共通) (6) その他	・2019年度の捕獲事業として、遺産地域内ではくくりわなを主体とした捕獲手法に以降しつつある。隣接地域では、猟友会と連携した銃による捕獲などが予定されている。 ・隣接地域の管理方針: これまでの低密度化は農林業被害の抑制には成功したが、利活用施設でシカが不足するという課題が生じている。今後は、利活用とのバランスを考慮した、コミュニティベースでの新たな管理目標を検討する必要がある。 ・より効果的な個体数調整のため、日没後の銃猟(夜間銃猟)の導入を検討。また、知床岬など捕獲個体の搬出が困難な地域では、生態系への影響を考慮しつつ、捕獲個体をその場に残置(残置)する案が議論。 ・植生モニタリングでは、一部で回復傾向が見られるものの、森林の回復には時間がかかるとの認識。5年ぶりに実施された鳥類・昆虫類の調査では、今後の調査手法の標準化が課題。		

会議名	年度	回	開催日時	議事次第	議事概要	計画等	主なトピック
マ W G	2020年度 (R2)	第1回	2020/7/28	(1) 2019(令和元)シカ年度実行計画実施結果について (2) 鳥類・昆虫類のモニタリングについて (3) 2020(R2)シカ年度実行計画案について (4) 日没時銃猟と捕獲個体の残置について (5)世界遺産地域の隣接地域における今後の管理方針について (6)長期モニタリング計画の評価項目の評価について(エゾシカ関係) (7)その他	・2019年度の実施結果として航空カウント調査では、幌別・岩尾別地区で発見密度が目標値を下回ったが、知床岬やルサ・相泊地区では目標を達成できなかった。知床岬では、定着型のメスはほぼ捕獲できたものの、オスの比率が増加している。 ・2020年度の実行計画を提案。知床岬では、高コストなヘリコプターによる捕獲を休止し、新たな捕獲手法の検討に注力することが提案。 ・個体数調整を一層推進するため、日没後の銃猟(夜間銃猟)の導入が検討された。当面は安全性を考慮し、日没後1時間に限定して実施する方針が承認された。また、搬出が困難な場所では捕獲個体をその場に残置することも議論された。 ・隣接地域の管理方針について斜里・羅臼両町から現状と方針が説明され、利害関係者との合意形成の遅れが指摘。利活用とのバランスを考慮した、コミュニティベースでの持続可能な管理目標を早急に策定する必要性が強調。 ・植生モニタリングでは、調査業者の資質や調査時期の遅れがデータの信頼性に影響を与える懸念。鳥類や昆虫類のモニタリングについては、エゾシカの影響を厳密に評価することの難しさから、5年に1度のインベントリ調査として多様性の動向を把握する方針が提案。	第3期 知床半島 エゾシカ 管理計画 2017年4月計画	知床岬の冬期確認数が急増 ・先端部の生息密度は58頭/k㎡に達した。捕獲圧を十分かけることができていなかった間に増加したものを航空カウントで見落としていたのか、あるいは、捕獲を避けて南部に分布をシフトしていた群が増加しつつ先端部に流入した可能性が考えられた。 ・ストーキングによる銃猟やハイシートをを用いた待ち伏せ式の狙撃、ドローンをを用いた事前偵察に基づく捕獲などさまざまな手法を試行。 相泊以南の崩浜南部での捕獲試行。海岸段丘斜面に餌づけして待ち伏せ式狙撃で捕獲を実施
		第2回	2020/12/14	(1) 2020(R2)シカ年度冬期事業計画(報告) (2) 2020(R2)シカ年度植生モニタリング結果(速報) (3) 知床半島エゾシカ管理計画の改訂について (4) 長期モニタリング計画の評価項目Ⅲ・ivの評価について (5) その他	・2020年度の冬期事業として、日没後1時間の夜間銃猟や、知床岬の斜里町側での捕獲個体の一部残置が試験的に実施。低密度状態の維持が課題であり、捕獲時のシカの反応などのデータを収集が重要。 ・知床岬の草原では回復が停滞気味で、特定の植物への採食が目立つようになっている。森林の回復は遅く、草原はある程度回復傾向にあると報告。森林の回復には林冠ギャップの有無が影響するため、シカの増減と単純に結びつけて考えない方がよいとの指摘。 ・管理計画の改訂: 隣接地域では、被害の抑制と資源利用のバランスをどうとるかが課題。遺産地域内では生物多様性の保全を優先し、低密度を維持する方針が確認。 ・隣接地域の管理方針: 斜里町、羅臼町ともに、地域での検討が進められている。羅臼町では、シカ肉の利活用について、根室管内という広域での連携が検討されている。		
	2021年度 (R3)	第1回	2021/7/1	(1) 2020(R2)シカ年度実行計画実施結果 (2) 2021(R3)シカ年度実行計画(案) (3) 第3期知床半島エゾシカ管理計画の総括ならびに第4期知床半島エゾシカ管理計画の策定に向けた検討 (4) その他	・2020年度の実施結果: 困いwanaへの警戒心が高まっているため、くくりwanaを中心に捕獲を実施。スノーモービルの導入で作業効率が向上した。知床岬では、捕獲圧が不十分であったことや、気象条件により発見されやすかったことなどから、確認頭数が増加した。 ・2021年度の実行計画案: 知床岬では、高コストのヘリコプターに頼らず、船でアクセス可能な4月から8月に、忍び猟とハイシート(高台)からの狙撃を組み合わせた捕獲を計画。ヒグマとの遭遇を避けるため、見通しの良い時期に実施する。日没後の銃猟も検討。 ・知床岬の捕獲効率を上げるため、ハイシートからの狙撃と、日没後の銃猟が提案。ハイシートの設置や捕獲個体の運搬のため、小型運搬機の使用や簡易な作業道の整備も検討。 ・第4期管理計画の策定に向け、捕獲手法の有効性や、関係機関との連携、地域住民との合意形成が課題。特に隣接地域では、多様な価値観を調整し、コミュニティベースでの持続可能な管理体制を構築することが重要。		夜間銃猟(日没時銃猟)の試行(幌別・岩尾別) ・北海道指定管理鳥獣捕獲等事業実施計画に基づき実施(2年間) ・捕獲効率、捕獲手法を検証 ・知床夜間銃猟簡易マニュアル(待ち伏せ式狙撃編)を作成 知床半島全域の航空カウント調査(4回目) ・全てのモニタリングユニットでシカの発見頭数は前年を上回っていた。 ・特に、M00: 知床岬と S04: 幌別－岩尾別は前年比がそれぞれ 362%、339%となり、シカの発見頭数が大幅に増加。
		第2回	2021/12/2	(1) 第4期知床半島エゾシカ管理計画の策定に向けた検討 (2) 長期モニタリング計画 第二期計画の策定に向けた検討(ヒグマ分含む) (3) その他	・2021年度は知床岬では、4月から8月にかけての捕獲を試行したが、天候不順やヒグマの出没により、十分な捕獲成果は得られなかった。一方、夜間銃猟については、安全性を確保した上で、有効な捕獲手法であることを確認。 ・第4期エゾシカ管理計画(案)を議論。遺産地域では、引き続き生態系の健全性を維持するため、エゾシカを低密度で管理する方針が確認された。隣接地域では、農業被害の防止と観光資源としての活用との両立を目指し、地域ごとに柔軟な管理目標を設定することが提案された。 ・長期的なモニタリングの継続性を確保するため、調査手法の簡素化や、ドローンなどの新技術の活用を検討。		
		第3回	2022/2/15	(1) 第4期知床半島エゾシカ管理計画(案)について (2) 長期モニタリング計画 第二期計画の策定について(ヒグマ分含む) (3) 今後のWGの進め方 (4) その他	・第4期知床半島エゾシカ管理計画(案)を議論。隣接地域における捕獲圧低下の理由や、知床岬地区の密度目標(中長期的に5頭/k㎡以下)などが修正、明記された。 ・次期長期モニタリング計画の枠組みを議論。地上カウント調査への具体的な数値目標の記載や、気候変動の影響を評価する指標として森林(エゾマツなど)を評価項目に加えることを検討。 ・アメリカの国立公園の管理方針が、人為的な介入を許容する方向に変化しており、知床の管理計画がむしろ世界の新たな基準に近づいているとの認識が示された。 ・来年度から本ワーキンググループを「ヒグマWG」と「エゾシカWG」に分離することが決定。 ・過去の航空写真との比較から、高山帯のハイマツやササの分布に相当な植生変化が確認され、気候変動の影響評価における重要なデータとなることが報告。		
						第4期 知床半島 エゾシカ 管理計画 2022年4月	

会議名	年度	回	開催日時	議事次第	議事概要	計画等	主なトピック
エゾシカWG	2022年度 (R4)	第1回	2022/7/4	(1) エゾシカワーキンググループの設置について (2) 2021(R3)シカ年度実行計画実施結果 (3) 2022(R4)シカ年度実行計画(案) (4) 長期モニタリングについて (5) その他	・2021年度の実行計画の実施結果が報告。知床岬地区でのエゾシカ確認個体数がこの2年間で急増していることが大きな課題として認識。 ・2022年度の実行計画案について議論。知床岬地区の捕獲目標40頭では不十分であり、自然増加分を抑制するためには少なくとも65頭の捕獲が必要との認識が示された。 ・今後の捕獲方針として、知床岬地区では捕獲を一時休止して抜本的な対策を練るべきとの意見も出されたが、まずは捕獲目標を高めに設定し、多様な手法を尽くして捕獲を継続・強化する方向で合意。 ・ワーキンググループの再編により初のエゾシカに特化した会議であり、今後のモニタリング計画について議論。	第4期 知床半島 エゾシカ 管理計画 2022年4月	『 知床半島エゾシカ管理計画(第4期)の策定・開始 』 ・計画の枠組みに大きな変更はなく、第3期計画の遂行状況を総括した上で、現状を踏まえた修正を実施。 ・個体数の削減に成功していた知床岬地区のエゾシカが個体数減少と警戒心の高まりなどから捕獲の効率が低下して、再び個体数が増加したことへの対応が計画改定においても焦点。 エゾシカ・ヒグマWG会議が、エゾシカWG会議とヒグマWG会議の2つに改組 ・エゾシカWG会議の座長は科学委員会の発足当初から参画してきた石川幸男弘前大学名誉教授が就任。 冬期カムイワッカ方面におけるエゾシカの捕獲手法の検討のための現地調査実施 融雪期における道々知床公園羅臼線の法面での捕獲手法検討
		第2回	2022/11/30	(1) 2022(R4)シカ年度エゾシカ実行計画について (2) 長期モニタリング計画に基づく気象観測の進捗状況について (3) 知床世界自然遺産地域管理計画の見直しについて (4) その他	・危機的な状況にある知床岬地区について、捕獲圧の強化を議論。効率的な捕獲のため、警戒心を解く「罠(おとり)シカ」の早期準備や、夜間銃猟、船からの上陸による狙撃など、多様な手法を検討・準備しておく必要性が確認。 ・隣接地域では、地域住民からの意見聴取が重要である一方、林野庁、北海道、地元町といった関係機関の連携が不十分であり、統合的な管理体制の構築が課題であると指摘。 ・植生調査の結果、シカの食害が抑えられたことでササが増加し、他の草本や稚樹の更新を妨げている可能性が示された。シカの密度を減らすだけでは、1980年代の植生状態に戻すのは困難であることが示唆。 ・世界遺産地域全体の管理計画の見直しにあたり、エゾシカの管理については、具体的な生息密度の目標値の明記や、科学委員会とワーキンググループの連携体制を明確に記述すべきとの意見が出された。		
	2023年度 (R5)	第1回	2023/6/19	(1) WG委員について (2) 2022(R4)シカ年度実行計画実施結果 (3) 2023(R5)シカ年度実行計画(案) (4) 知床世界自然遺産地域管理計画の見直し検討 (5) 長期モニタリング計画・総合評価手法 (6) 気候変動に対する順応的管理戦略について (7) その他	・2022年度の実行計画では、特に知床岬地区でのエゾシカ発見頭数が増加に転じ、目標捕獲数を大幅に下回ったことが重大な懸念事項として報告された。 ・知床岬地区の対策として、少人数での巻き狩りや高所からの狙撃が試みられたが、期待された成果は得られなかった。今後の捕獲圧強化のため、大規模な囲いわなの設置など抜本的な手法の検討も提案されたが、まずは既存の手法を工夫しつつ、罠(おとり)シカの導入などを試行する方針が議論。 ・個体数が低密度で安定している幌別・岩尾別、ルサ・相泊地区では、労力のかかるくりわなから、より効率的で持続可能な捕獲手法へ移行すべきであると指摘された。 ・世界自然遺産地域管理計画の見直しについて、「明治以前の生態系をモデルとする」という基本方針の定義や、人間と生態系の関わり方など、管理の根幹に関わる重要な課題が提起。		知床岬の生息密度の増加傾向が継続 ・2021年には79頭/k㎡、2022年には63頭/k㎡、2023年には94頭/平方に達した。 知床岬捕獲作業中のヒグマ事故発生 ・6月にエゾシカのストーキング猟を行っていたハンターが、ヒグマに攻撃されて軽傷を負う事故が発生。 ・効率の良い手法への抜本的な再検討、安全対策に関する見直しが必要に。 岩尾別台地におけるドローンを用いた捕獲効率向上のための試験の実施
		第2回	2022/11/27	(1) エゾシカWGの設置要綱の改訂について (2) 2023(R5)シカ年度エゾシカ実行計画の実施状況について (3) 知床世界自然遺産地域管理計画の見直しについて (4) 第2期長期モニタリング計画について (5) その他	・知床岬地区の危機的な状況を踏まえ、2023年度の冬期事業として、大規模な囲いわなの設置や、積雪期におけるスノーモービルを活用した効率的な捕獲が計画。 ・知床岬の植生について、チシマゲンゲなどの希少種が壊滅的な状況にあることが報告。エゾシカの食害を抑制するため、緊急的な防鹿柵の設置が検討されている。 ・今後の課題として 知床岬におけるエゾシカの個体数管理と、それに伴う植生の回復が喫緊の課題であることが再確認された。関係機関が連携し、実効性のある対策を迅速に進める必要性が強調。		
	2024年度 (R6)	第1回	2024/6/25	(1) 2023(R5)シカ年度実行計画・実施結果 (2) 2024(R6)シカ年度実行計画(案) (3) 気候変動に対する順応的管理戦略について (4) その他	・ルサ・相泊地区や幌別・岩尾別地区では、比較的計画に沿って個体数管理ができている。 ・航空カウント調査では、知床岬の個体数が大きく増加している。 ・前年度に知床岬地区でエゾシカ捕獲従事者がヒグマに襲われる事故があったため、今年度は知床岬での捕獲を一旦休止している。捕獲休止期間中に、増加したエゾシカへの対処法や、植生の回復傾向をどう評価するかなどを検討。 ・来年度以降の計画を年度内に検討し、適切な個体数管理を目指す。		
		第2回	2024/11/22	(1) 2024(R6)シカ年度エゾシカ実行計画の実施状況について (2) 2025(R7)シカ年度エゾシカ実行計画について (3) その他	・2024年度は、前年度のヒグマによる人身事故を受け知床岬地区での捕獲を休止した結果、同地区のエゾシカが大幅に増加していることが報告。 ・2025年度の計画として、ヘリコプターを用いた大規模な冬期巻き狩りを検討。しかし、既存の柵の破損状況や、捕獲個体の搬出方法、予算の制約といった課題から、この計画の実施は1年先延ばしとする方針。 ・大規模捕獲を見送る代わりに、2025年の春に、待ち伏せ式狙撃や簡易的な囲いわなといった、より小規模で新たな捕獲手法を試験的に実施。麻酔銃で数頭を生け捕りにして標識を付ける「罠(おとり)シカ」の確保も試行。 ・植生モニタリングの結果、シカの密度が低下した地域でも、ササが密生することで他の植物や樹木の稚樹の生育が妨げられる可能性が指摘。シカの食圧低下が、必ずしも多様な植生の回復に直結しない複雑な実態が示された。 ・隣接地域における狩猟について、今期は事前に地元関係者との調整を行い、隣接地域のほぼ全てが狩猟に開放されたことが報告。		